

1-01

蜜柑

みか

- ・味わい深い文章
  - ・短編の名作
  - ・神奈川・横須賀線が舞台



『舞踏会・蜜柑』芥川龍之介著 角川文庫(1968.11) ¥500

©角川書店

みどころ

芥川龍之介中期（大正8（一九一九年））の傑作である。この小説家一流の理知的で硬質な文体と、計算しつくされた構成に注目したい。生身の小説家である芥川を想わせる一人称の語りによって、クライマックスへと導かれる本作品の短編小説としての完成度の高さは、彼の非凡な才能を証している。作品の読みどころの第一は、序盤で語られる「疲労」「倦怠」「憂鬱」「卑俗」「不可解」「下等」「退屈」などの「憂つた冬の日暮」の陰鬱なイメージと、「小鳥のように声をあげた三人の子供たちの上に乱落する鮮な「蜜柑の色」という朗なイメージとの対比にあるだろう。作品全体にちりばめられている色彩に関わる表現に注意して読み進めたい。なお芥川には、東京帝国大学英文科卒業後の大正5（一九一六年）12月より、軍港横須賀にあつた海軍機関学校の英語の嘱託教官として教職に就いた経歴がある。

「私」（語り手）は「云いようのない疲労

掘りだしものカタログ4 ■ 4-01  
『河童』芥川龍之介 著  
岩波文庫 (2003.10) ¥399



芥川龍之介

あくたがわりゅうのすけ

明治 25 (1892) · 3 · 1 ~ 昭和 2 (1927) · 7 · 24。小説家・俳人。東京都生。東京帝国大英文科卒。第三・四次「新思潮」同人、『鼻』(大5)を漱石に激賞される。西洋文学と江戸文化を主な背景に、多彩な形式・テーマで洗練された短編小説を次々に発表。大正 8 年、大阪毎日新聞社社友。新たな創作方法を模索し、昭和に入り谷崎潤一郎と「小説の筋」について論争したが、「唯ほんやりした不安」の言葉とともに自殺。遺作『歎車』(昭2)『西方の人』(同)等。(小澤純)

かなたれ込んでくる。しかし小姐は「私には無頓着で窓から頭を出してゐる。汽車がトンネルをぬけ、冷やかな外気が車内に入つてくる。汽車が貧しい村の踏み切りにさしかかると同時に、「私は踏み切りの向こうに三人の男の子が並んで立つてゐるのを認める。少年たちがいつせいに喚声をあげた。娘は手を伸ばしてそれに答えると同時に、男の子たちの上に蜜柑が降つてくる。奉公先に向かう娘が、見送りにきた弟たちに蜜柑を投げてその労に報いたのであつた。この出来事を目撃することによつて、「私は「疲労と倦怠」、そして「不可解な、下等な、退屈な人生」をわざかに忘れることができた、と語る。(佐野正後)

と信息」をたがえながら機須賀線の新車を待つ。発車間際に十三、四の小娘が客車に入ってくる。「私」は小娘の服装の不潔さ、下品な顔立ち、三等の切符を握つて二等に乗り込んでくる愚鈍さにいらだつ。「私」は夕刊を読み始めるが、紙面に載つてゐる世の中の事件も「あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ち」の小娘も、何もかもが「不可解な、下等な、退屈な人生の象徴」であるように思つ。「私」はふと何かに脅かされるような気配がして目をさます。小娘が「私」の隣の座席に移つてきたのだ。娘はしきりに窓ガラスを開けようとする。汽車はトンネルに入ろうとしているところだった。「私」は無神経な小娘に強い不快感を持つ。汽車がトンネルに入ると同時に小娘が窓を開けた。車内に煤煙

四書詩

初出は「新潮」大正8（1919）・5。初版は『影籠館』大正9（1920）・1、春陽堂刊。『さくら日本文学』602（川端康成編）、

卷 19 (200)

■文庫情報  
著者：川子春、井川龍之介 著 新潮文庫（1968.11）￥300

『蜘蛛の糸・杜子春』芥川龍之介著 新潮文庫(2007.11) ￥924  
『ねじまき』芥川龍之介著 ちくま文庫(2007.11) ￥924